

―合宿導入講義―

原点としての明治

―祖国・人生・学問を統一する視点の確立のために―

福岡教育大学教授

山田輝彦

一、三条実美 遣歐米特命全權大使「送別の辞」(明治四年十一月十二日)

外国ノ交際ハ国ノ安危ニ関シ、使節ノ能否ハ国ノ榮辱ニ係ル。今ヤ大政維新、海外各国ト並立ヲ図ル時ニ方リ使命ヲ絶域万里ニ奉ズ。外交内治、前途ノ大業、其成其否実ニ此舉ニ在リ。豈大任ニアラズヤ。大使天然ノ英資ヲ抱キ、中興ノ元勳タリ。所属諸卿皆国家ノ柱石、而テ所率ノ官員、亦是一時ノ俊秀、各欽旨ヲ奉ジ、同心協力、以テ其職ヲ尽ス。我其必ズ奏功ノ速カラザルヲ知ル。行ケヤ。海ニ火輪ヲ転ジ、陸ニ汽車ヲ輾ラシ、万里馳駆、英名ヲ四方ニ宣揚シ、無恙帰朝ヲ祈ル。

二、福沢諭吉「文明論之概略」(明治八年三月)

人或は云はん。人類の約束は唯自国の独立のみを以て目的と為す可らず。尙別に永遠高尚の極に眼を着す可しと。此言真に然り。人間智徳の極度に至ては其の期する所、固より高遠にして、一国独立等の細事に介々たる可らず。僅に他国の輕侮を免かるゝを見て直に之を文明と名く可らざるは論を俟たずと雖ども、今の世界の有

様に於て、国と国との交際には未だ此高遠の事を談ず可らず。若し之を談ずる者あれば、之を迂濶空遠と云はざるを得ず。殊に目下日本の景況を察すれば、益々事の急なるを覚え、又他を顧るに遑あらず。先づ日本の国と日本の人民とを存してこそ、然る後に愛に文明の事をも語る可けれ。国なく人なければ、之を我日本の文明と云ふ可らず。

三、国木田独歩「愛弟通信」(明治二十七年十月)

〇〇日、〇〇丸の喫煙室に某少佐と語り、東方の形勢を論ずる際、吾が眼端なく窓外千里の波濤に転じて、水天一髪の光に注ぎたる刹那、こみあげ来るは慷慨の涙と、吾が同胞四千万よと叫ぶ、天外遊士の懐郷の涙なりき。談じては黙し、黙しては談じ、吾が感情次第に昂揚して、偏へに吾が国民を思ふの念堪へずなりぬ。

四、連合艦隊司令長官・東郷平八郎「大本營への打電」(明治三十八年五月二十七日)

敵艦見ユトノ警報ニ接シ、聯合艦隊ハ直ニ出動、之ヲ撃滅セントス。

本日天気晴朗ナレドモ浪高シ。

五、石川啄木、十一月四日の歌九首(明治四十二年十一月四日)―伊藤博文「国葬の日」―

またとなく悲しき祭りをろがむと集へる人の顔の悲しさ

とぶらひの砲鳴りわたり鳴りをはるそのひと時は日も照らずけり

もろもろの悲しみの中の第一のかなしき事に会へるものかも

火の山の火吐かずなれるその夜のさびしさよりもさびしかりけり
御柩みひつぎの前の花環はなわんのことさらに赤き色など目にのこりつつ
ゆるやかに柩ひつぎの車くるまきしり行くあとに立ちたる白き塵ちりかな
目の前にたふれかかれる大木は支へがたかり今日のかなしみ
くもりたる空より雨あめの落おちくるをただ事こととしても今日は思はず
しかはあれ君のごとくに死ぬことは我が年ごろの願ひなりしかな

×

×

いにしへの彼の外国とつくにの大王の如くに君のたふれたるかな
夜をこめていたみ給へる大君おほぎみの大御心おほみこころもかしこかりけり

六、与謝野晶子 佐久間大尉を傷む歌（明治四十四年五月）

ひんがしの国のならひに死ぬことを誉むるは悲し誉めざれば悪し
勇しき佐久間大尉とその部下は海国うみくにの子にたがはずて死ぬ
瓦斯がすに酔よひ息ぐるしとも記ししおく沈しみし艇ふねの司令塔しやうりやうたにて
大君おほぎみの潜航艇せんかうていをかなしみぬ十尋とひろの底そこの臨終いまはにもなほ
武夫ぶのふのところ放はなたず海底うたそこの船ふねにありても事こととりて死ぬ
海底うたそこの水みづの明ありに認めした永とこき別わかれのますら男おとこの文ふみ

水漬みづきつつ電燈でんとうきえぬ真黒まぐろなる十尋とひろの底そこの海の冷ひやたさ
海底うたそこに死しは今いませまる夜の零時じやうじ船ふねの武夫ぶのふころも湿うるはふ
大君おほぎみの御名みなは呼よべどもあな苦し沈しみし船ふねに悪わるしき瓦斯がす吸すふ
いたましき艇長ていぢやうの文ふみますら男おとこのむくる載のせたる船ふねあがりきぬ
やごとなき大和おほなだましひある人は夜の海底うたそこに書置かきおきを書く
海うみに入り帰かへりこぬ人ひと十四じよ人にんいまま悲かなしき武夫ぶのふの道みち

七、乃木希典なまき陸軍大將りくぐんたいしやう辞世じせい（大正元年九月十三日）

うつし世よを神かみさりましし大君おほぎみのみあとしたひて我われはゆくなり
神かみあがりあがりましぬる大君おほぎみのみあとはるかにをろがみまつる

静子夫人辞世

出いでましてかへります日ひのなしときくけふの御幸みゆきに逢あふぞかなしき